

湾戸7号墳

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第7集

倉敷埋蔵文化財センター

1998.3

序

記紀をはじめ万葉集にもしばしば登場する吉備の児島は、その温暖な気候とあいまって、古くは旧石器時代から中・近世にいたるまで各時代を通じて多くの遺跡の存在が知られています。

児島は、現在は陸続きの半島となっておりますが、藤戸の瀬戸が開いていた中世頃までは文字通り瀬戸内海に浮かぶ島がありました。かつての児島の西海岸にあたる倉敷市福田町から塩生、通生にかけての地域には、古代の製塩遺跡が多くみられ、その背後の山には数々の古墳が点在しております。

今回報告いたします湾戸7号墳は、こうした古墳のひとつであり、特別養護老人ホームの建設に伴い、発掘調査が行われました。古墳自体は、横穴式石室を有するもので、すでに開口しており、盗掘も受けしておりましたが、鉄刀をはじめ貴重な副葬品の数々が発見され、石室ともども多くの貴重な資料を得ることができました。

この報告書は、こうした遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が今後の文化財保護、保存に活用されますとともに、学術研究のための資料として、また郷土の歴史の研究の資料として、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、出土資料の整理に至りますまで、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして衷心より厚くお礼申し上げます。

平成10年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長 山田錦造

例　　言

1. 本書は、特別養護老人ホーム建設工事に伴い発掘調査を実施した、倉敷市福田町福田236番地外に所在した湾戸7号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、倉敷埋蔵文化財センター学芸員　鍵谷守秀・藤原好二・片岡弘至が担当し、1997年2月13日～4月22日にかけて実施した。
3. 出土遺物の整理は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては、内田智美・木曾敏江・三宅利恵子・大江久仁子の協力を得た。
4. 本書の執筆は、第2章を鍵谷、その他を片岡が担当し、編集は片岡が行った。
5. 発掘調査における遺構写真は鍵谷が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。
6. 掘図に使用した高度値は海拔高であり、方位はいずれも磁北である。
7. 本調査は、既に「倉敷埋蔵文化財センター年報4～1996年度～」においてその概要が公表されているが、本報告をもって正報告とする。
8. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、全て倉敷埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の経過	5
第3節 調査組織	5
第3章 発掘調査の概要	6
第1節 墳丘と周溝	6
第2節 横穴式石室	9
第3節 遺物の出土状況	13
第4節 古墳の再利用	13
第5節 出土遺物	14
第4章 まとめと考察	25

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2	第12図 鉄鎌実測図 1 (S=1/2)	17
第2図 古墳の位置 (S=1/2,000)	4	第13図 鉄鎌実測図 2 (S=1/2)	18
第3図 古墳測量図 (S=1/100)	6	第14図 鉄鎌実測図 3 (S=1/2)	19
第4図 墳丘・石室断面図 (S=1/50)	7	第15図 両頭金具	20
第5図 横穴式石室実測図 (S=1/50)	10	第16図 鉄釘実測図 (S=1/2)	20
第6図 石室平面図 (S=1/40)	11	第17図 その他の鉄器 (S=1/2)	21
第7図 遺物出土状況	12	第18図 耳環実測図 (S=1/2)	21
第8図 古代の土壤 (S=1/20)	13	第19図 玉類実測図 (S=1/1)	22
第9図 須恵器実測図 (S=1/3)	14	第20図 石鎌	23
第10図 土師器実測図 (S=1/3)	14	第21図 土器実測図 (S=1/3)	23
第11図 鉄刀・刀装具実測図 (S=1/3)	15		

表目次

表1 耳環計測表	21	表2 ガラス玉計測表	23
----------------	----	------------------	----

図版目次

図版1	1. 調査前の状況 2. 墳丘検出状況(南から) 3. 墳丘検出状況(西から)	図版5	土器・鉄器(1)
図版2	1. 調査終了後(南から) 2. 調査終了後(北から) 3. 調査終了後(西から)	図版6	鉄器(2)
図版3	1. 土層断面(北側) 2. 土層断面(西側) 3. 横穴式石室	図版7	鉄器(3)
図版4	1. 遺物出土状況(1) 2. 遺物出土状況(2) 3. 調査風景	図版8	鉄器(4)
		図版9	鉄器(5)・耳環
		図版10	玉類・その他の遺物

第1章 遺跡の位置と環境

湾戸7号墳は、倉敷市福田町福田に所在する。福田町は、倉敷市の南部、水島臨海工業地域の北東に位置している。福田町は背後に、標高258mの種松山の山系が連なり、南には谷を挟んで児島半島の山々が連なっている。

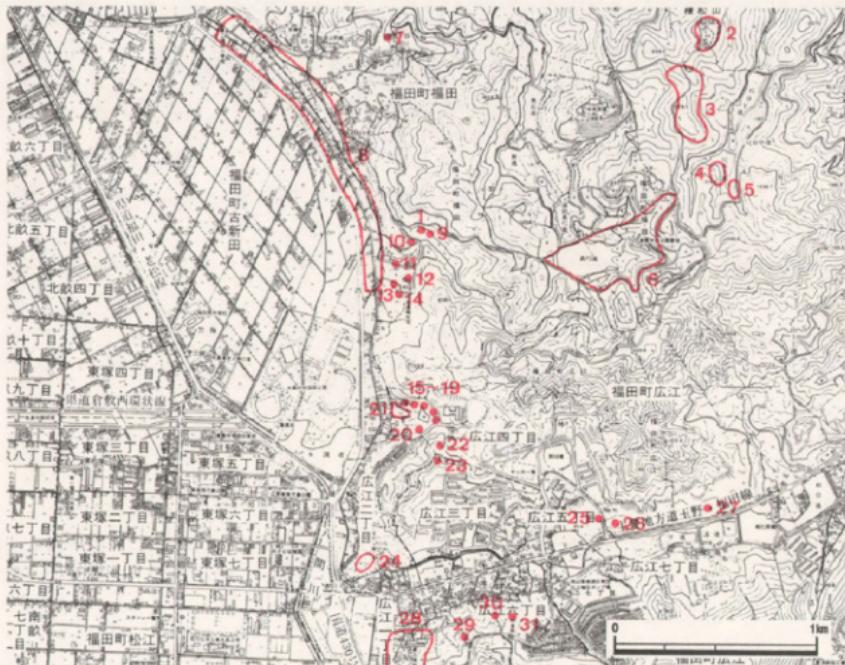
古墳の西側は、現在は水田および住宅地が広がっているが、縄文海進以降、近世に干拓が行われるまでは、水島灘が入り込んだ海岸部となっていた。この地域の、古代の人々の活動痕跡は、種松山の山頂とその付近及び山裾の周辺と限られた範囲で認められる。

周辺での最も古い遺跡は、旧石器時代にさかのばる。旧石器時代には、瀬戸内海は陸地化しており、狩猟に際し獣物を獲得し易いように、遺跡は眺望の良い丘陵頂部や丘陵先端部に位置している。遺跡の例は、種松山南遺跡・真弓池遺跡・山の鼻遺跡が挙げられる。市内の旧石器時代の遺跡のはほとんどは、このように平野を見渡せる高台を拠点とし、狩猟・採集の生活を行っていたものである。

しかし、縄文時代になると周囲の様子は一変する。縄文海進によって、市内の大半の地域は海に水没することとなった。当地区も海に面した地域となり、陸地としては、山裾部分に砂州を残すのみとなっていました。付近の縄文時代の遺跡は、当時の海岸部分にあたる広江・浜遺跡⁽¹⁾や種松山山頂付近の一尺谷上池遺跡・真弓池遺跡等が存在し、著名な福田貝塚も湾戸7号墳から北へ1.5kmばかりの地点に存在している。

弥生時代の遺跡で山裾部分に存在するものは、三軒屋遺跡のように小規模なものであり、大きな範囲で確認されている遺跡は、種松山の山頂およびその付近に存在している。このことは、水稻耕作は行われだしたもの、丘陵を控えたこの地区は、水稻耕作に適した場所が獲得できず、依然漁労や狩猟による生計を立てていたためと思われる。しかし、この地域の弥生時代の遺跡は、十分な調査が行われておらず、いまだ実態が掴めていないものが多い。突出した例ではあるが、種松山山頂遺跡からは銅鐸が出土している⁽²⁾。銅鐸の出土は、市内唯一のものである。この銅鐸の存在から、当地区は海上交通の要所に当たる地域として、交通権を掌握した有力集團が存在したことがうかがえる。

この地域の古墳時代の生業は、土器製塩を主体とした海浜生活を中心とするものであった。湾戸7号墳の眼下に南北に広がる砂州上には、湾戸遺跡が存在し製塩土器が検出されている。この遺跡より、南へ1.5kmの地点には、広江・浜遺跡が存在し、同様に土器製塩を行っていたことが確認されている⁽³⁾。また、種松山山系の山裾部分には多数の古墳が確認されている。このうち、まとまって存在するものとして、湾戸古墳群と三軒屋古墳群が挙げられる。湾戸古墳群は、湾戸遺跡の東の丘陵尾根及び丘陵裾部に存在し、7基を数える。古墳群のうち2基は宅地および道路の造成により現在は消滅している。この湾戸古墳群は湾戸遺跡を生活基盤とした首長層の古墳と考えられる。また、三軒屋古墳群には、6基の古墳が確認されている。なお、近接する広江北地西古墳群の2基の古墳



番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	湾戸7号墳	古墳	今回調査	17	三軒屋3号墳	古墳	
2	種松山山頂遺跡	弥生	銅鐸出土	18	三軒屋4号墳	"	
3	種松山南遺跡	旧石器	石器散布	19	三軒屋5号墳	"	
4	一尺谷上池第2遺跡	縄文～弥生	土器・石器散布	20	三軒屋6号墳	"	
5	一尺谷上池第1遺跡	"	"	21	三軒屋遺跡	縄文～古墳	破壊消滅
6	真弓池遺跡	旧石器～中世		22	広江北地西2号墳	古墳	
7	高塚古墳	古墳		23	広江北地西1号墳	"	
8	湾戸遺跡	"	製塙遺跡	24	山の鼻遺跡	旧石器	
9	湾戸6号墳	"		25	広江北地東2号墳	古墳	
10	湾戸5号墳	"		26	広江北地東1号墳	"	
11	湾戸4号墳	"	破壊消滅	27	溝池北古墳	"	
12	湾戸3号墳	"	破壊消滅	28	広江・浜遺跡	縄文～中世	調査後消滅
13	湾戸2号墳	"		29	広江南地1号墳	古墳	
14	湾戸1号墳	"		30	広江南地2号墳	"	
15	三軒屋1号墳	"		31	広江南地3号墳	"	
16	三軒屋2号墳	"					

第1図 周辺の遺跡

も三軒屋古墳群と同一地域の首長墳とみて差し支えなかろう。三軒屋古墳群の西側には三軒屋遺跡が確認されているが、範囲が狭小であり、この遺跡以外にも付近に古墳時代の集落が存在した可能性があろう。周辺の他の古墳は点在しているものの、古墳の存在する場所は、現在の集落の小字の単位とほぼ対応している。これは、種松山から張り出した尾根筋の地形に規制され、尾根筋ごとに区切られた単位で地区を形成し集落を造っていったためと考えられる。

中世の遺跡は、真弓池遺跡と広江・浜遺跡が確認されている。だが、倉敷市内に存在する他の中世の遺跡同様に、詳細は不明である。

この地域では十分な発掘調査等が行われておらず、遺跡の実態も不明なものが多い。記述し得る資料が少なく不十分な素描ではあるが、清戸7号墳周辺の歴史的変遷の概略は以上のとおりである。

註(1) 間壁忠彦・間壁蘿子「倉敷市広江浜遺跡調査概報」『倉敷考古館研究集報 第2号』1966年
間壁忠彦・間壁蘿子ほか『広江・浜遺跡』倉敷市教育委員会 1979年

(2) 梅原来治「岡山県下発見の銅鐸」『吉備考古第83号』1951年

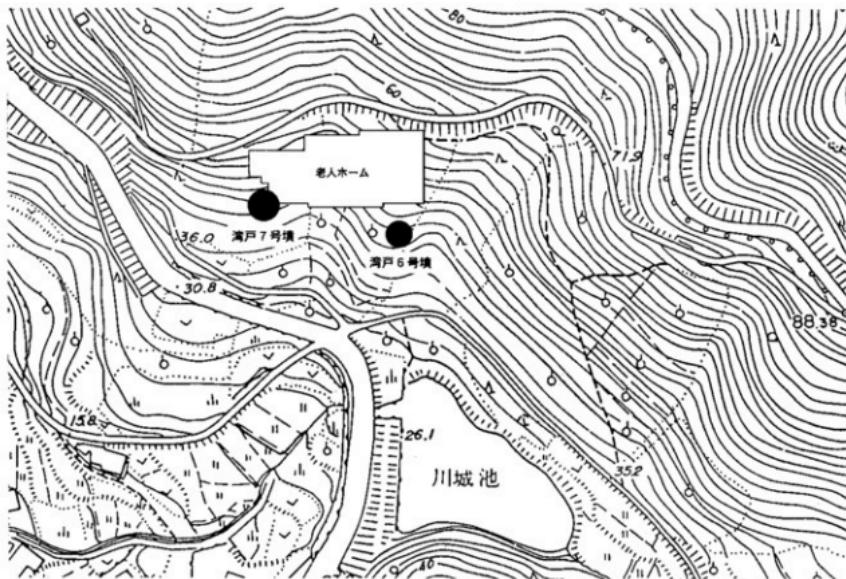
(3) 註(1)文献

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成7年(1995年)9月、倉敷市福田町福田に特別養護老人ホームの建設が計画された。当該地は、倉敷埋蔵文化財センターから東へわずか500m程の丘陵南側斜面であり、この開発区域内には湾戸6・7号墳の2基の古墳が存在していた。ところが、この段階では建物の大きさや位置など具体的な事は決まっていなかったため、その設計にあたっては、これらの古墳を十分考慮に入れたうえで行うよう要望した。そして、翌平成8年(1996年)6月、建物の概略が決定したのを受けて、具体的な協議を行った。

まず、湾戸6号墳については開発区域内ではあるものの、建物の基礎から10m程度離れており、工事による直接的影響はないと判断し、現状保存することとなった。一方、湾戸7号墳は建物の南西隅にあたっており、このままでは丘陵斜面に打ち込まれる大きな基礎により、古墳に大きな影響が及ぶことが明らかとなった。そこで、建物自体の位置を東へずらすことを提案したが、敷地の関係からそれは困難であり、また老人ホームという性格を考え、やむを得ず発掘調査による記録保存を行うこととなった。



第2図 古墳の位置(S=1/2,000)

第2節 調査の経過

湾戸7号墳の発掘調査は、平成9年2月13日から4月22日にかけて実施し、その費用は全額施主である（仮称）社会福祉法人 淳邦会が負担した。

古墳が位置する丘陵は竹林となっており、これらの樹木を伐採後基準点を設置し、調査前の写真撮影及び地形測量を行った。古墳の調査は、まず墳丘の検出を目的として表土の除去から始め、これと平行して土層確認のためのトレンチを、基準点を中心に東・西・北方向へそれぞれ設定し掘り下げを行った。その結果、墳丘は段々畳の造成により大きな影響を受けてはいたものの、古墳の背後の周溝の一部は完全に残っていることが明らかとなった。そして、周溝を掘り下げ墳丘の検出を行った後、石室内の調査に取りかかった。

石室内の堆積土を除去していくと、当初は確認できなかった石室の最下段が現れ、最終的には石室高約2mとなり、予想外の大型石室であることが判明した。石室内の調査が完了した後、再び墳丘の調査に戻り、トレンチで確認した土層に従い墳丘土及び石室掘り方内埋土の除去を行った。古墳の石室は大型ではあるが非常に不安定に積まれていたため、土層観察用の土手は除去せず、東・西・北側トレンチ断面及び石室立面の実測をもって古墳の調査を完了した。

第3節 調査組織

湾戸7号墳発掘調査委員会

委員長	山田錦造	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	佐々木将勝	タ	教育次長
委 員	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会 長
監 事	荻野延治	倉敷埋蔵文化財センター	館 長
事務局長	福本 明	タ	主 任
調査員	鍛谷守秀	タ	学芸員
タ	小野雅明	タ	タ
タ	藤原好二	タ	タ
タ	中野倫太郎	タ	タ
タ	片岡弘至	タ	タ

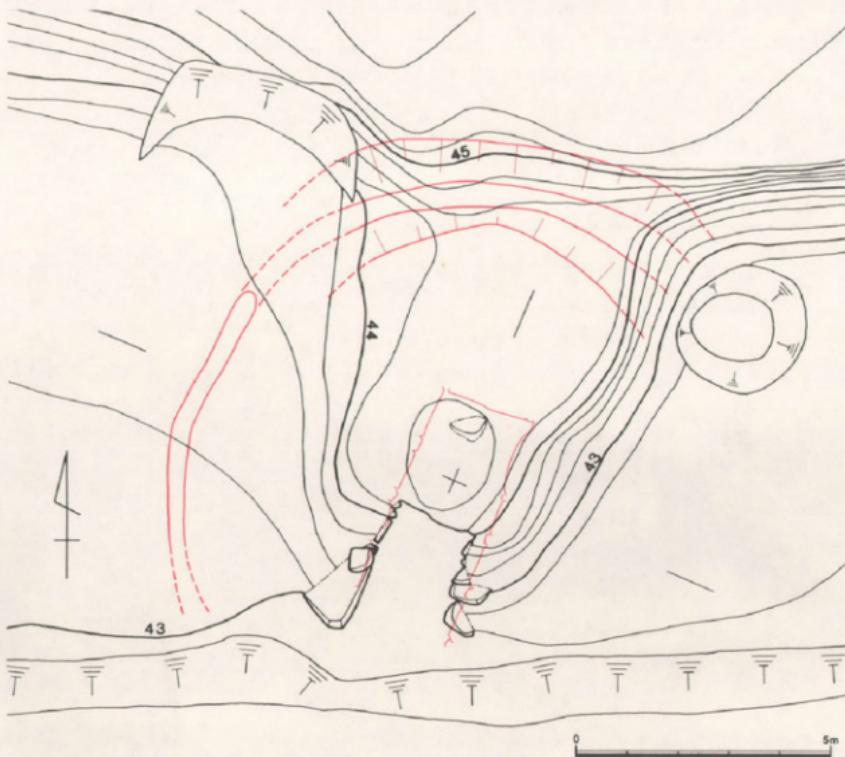
（肩書き及び役職名は、いずれも調査当時）

第3章 発掘調査の概要

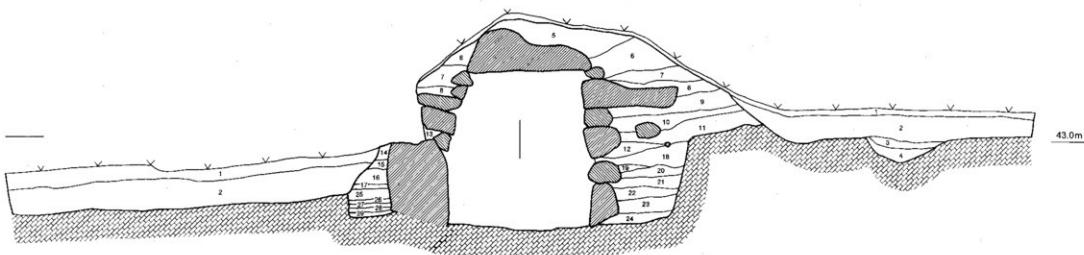
第1節 墳丘と周溝

清戸7号墳は、種松山の山系から西へ分岐して延びる尾根筋の標高43mの南斜面に位置している。この古墳の周辺は現在は竹林となっているが、古くは段々畑として利用されていたようである。

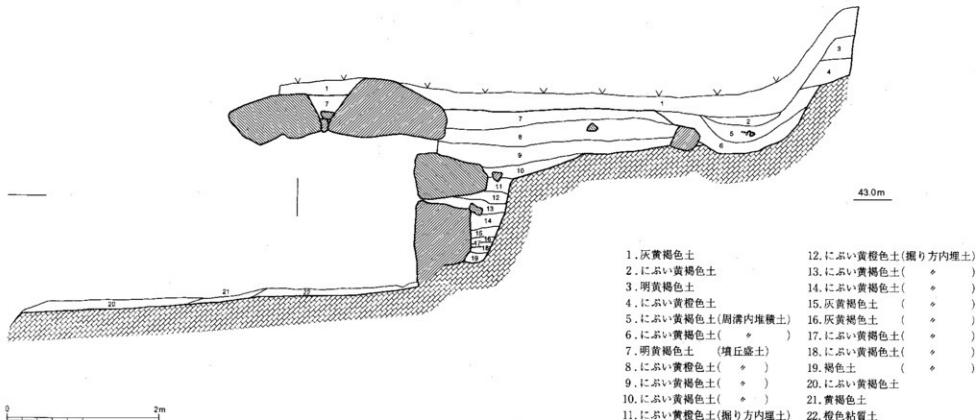
石室の前端部は、前述した畑の段の築造により大きく破壊をうけており、大きな段の断面に石室が開口している状況であった。このため、調査前の状況から石室の全長について推測することは不可能であった。墳丘についても段々畑の造成によって大半が削りとられており、石室の西側から石室上部にかけてがこんもりとした高まりとなって残っているのみであった。天井石は、元位置で2枚が残存しており、石室内に1枚が転落していた。天井石の転落に伴い、側壁の前半部も上部の崩



第3図 古墳測量図 ($S=1/100$)



- | | | |
|--------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 灰黄褐色土 | 11. にぶい黄褐色土(埴丘盛土) | 21. にぶい黄褐色土(振り方内埋土) |
| 2. にぶい黄褐色土 | 12. 褐灰色土 () | 22. にぶい黄褐色土 () |
| 3. にぶい黄橙色土(周溝内堆積土) | 13. 明黄褐色土 () | 23. にぶい黄橙色土 () |
| 4. にぶい黄褐色土 () | 14. 明黄褐色土 () | 24. 灰黄褐色土 () |
| 5. 明黄褐色土 (埴丘盛土) | 15. 灰黄褐色土 () | 25. 明黄褐色土 () |
| 6. 明黄褐色土 () | 16. 褐灰色土 () | 26. にぶい黄褐色土 () |
| 7. にぶい黄橙色土 () | 17. 褐灰色土 () | 27. にぶい黄褐色土 () |
| 8. にぶい黄橙色土 () | 18. にぶい黄褐色土(振り方内埋土) | 28. 灰黄褐色土 () |
| 9. にぶい黄橙色土 () | 19. 褐灰色土 () | 29. にぶい黄褐色土 () |
| 10. にぶい黄褐色土 () | 20. にぶい黄橙色土 () | |



第4図 墳丘・石室断面図

落が認められた。墳丘の残存状況が悪く石室の崩落の危険性があるため、墳丘の発掘調査は石室主軸方向とそれに直行する方向にラインを設定し、この土層断面観察を中心に調査を行った。

石室の北側奥壁部分の土層断面観察によると、まず地表面から約1.1m掘り方を掘削し、奥壁の根石を据え、掘り方下半部で10cm前後の厚さで埋土を版築状に固く締めている。続く上部は15~20cmの厚さで埋土を下半部同様に固く締めている。石室東側の掘り方は、地表面から約0.4mと浅く、側壁の根石が半分埋まつたのみの状況である。掘り方内の埋土は、5~10cmの薄い厚さで版築状に固く締められていた。石室西側の掘り方は、地表面から約1.1mと深く、埋土は下部を約15cm前後、上部を20cm前後で版築状に固く締められていた。西側の掘り方が東側に比べ深いのは、西側の根石及び側壁に小ぶりの石材を使用しており、石材を安定させるためと思われる。

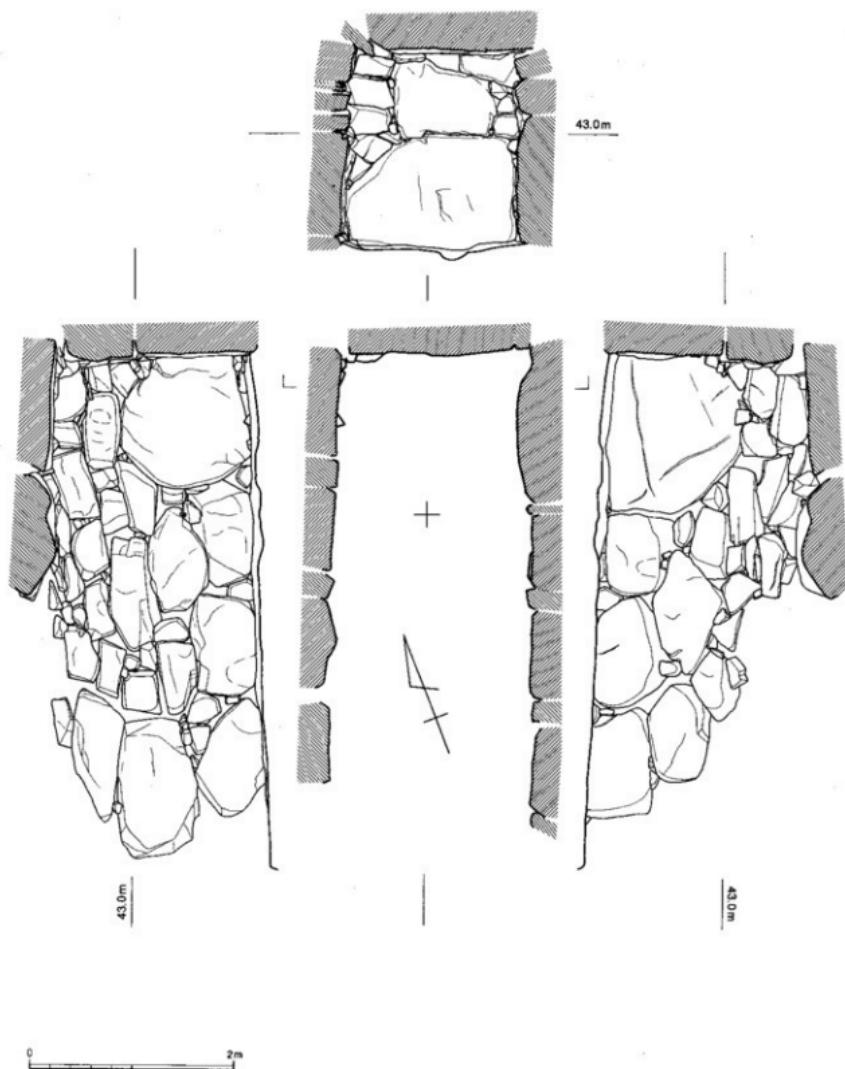
墳丘は、前述の掘り方上面から盛土を行っている。石室北側では、自然地形が奥壁付近でやや緩斜面となっていたため、1層目の盛土で整地を行い、順次20~30cm程度の厚さで盛土を行い墳丘を構築している。石室西側は、表土面から20cm前後の厚さで互層状に墳丘を構築している。なお、天井石付近は30cm以上の盛土を行っている。石室東側に至っては、段々畠の造成による削平で墳丘はほとんど残存していなかった。

周溝は、古墳の北側と西側にかけて検出された。北側の周溝は、周溝の外側の丘陵斜面を削り、周溝を造っており、検出面で幅約2.0m・深さ約50cmを測る。西側の周溝は、上部が段々畠の造成で削平されており、底部の残存のみが確認された。検出面で幅約1m・深さ30cmを測る。東側の周溝は畠の造成で完全に削平されていたが、元来北側から孤状に巡っていたものと考えられる。検出部分からの復元によると周溝の形態は、墳丘を中心にはば円形に巡っていたと思われる。残存部分の周溝から規模を復元すれば、推測の域ではあるが、周溝の外側部分で直径約13mの数値を得ることができる。墳丘の高さについては、比較的墳丘の残りの良い石室西側の観察により、周溝からの高さ約1.7m、石室床面からでは約2.8mを測ることができる。

第2節 横穴式石室

湾戸7号墳の内部構造は、大型の横穴式石室で南南西に開口し、その主軸方向は、N 20° Eを示す。石室入口付近部は、既に破壊を受け石材も抜き取られていた。天井部の崩壊も著しく、天井石は、前半部分に1枚が石室内にずり落ち、奥壁側に2枚が残存しているのみであった。残る2枚の天井石は、元位置をとどめていた。

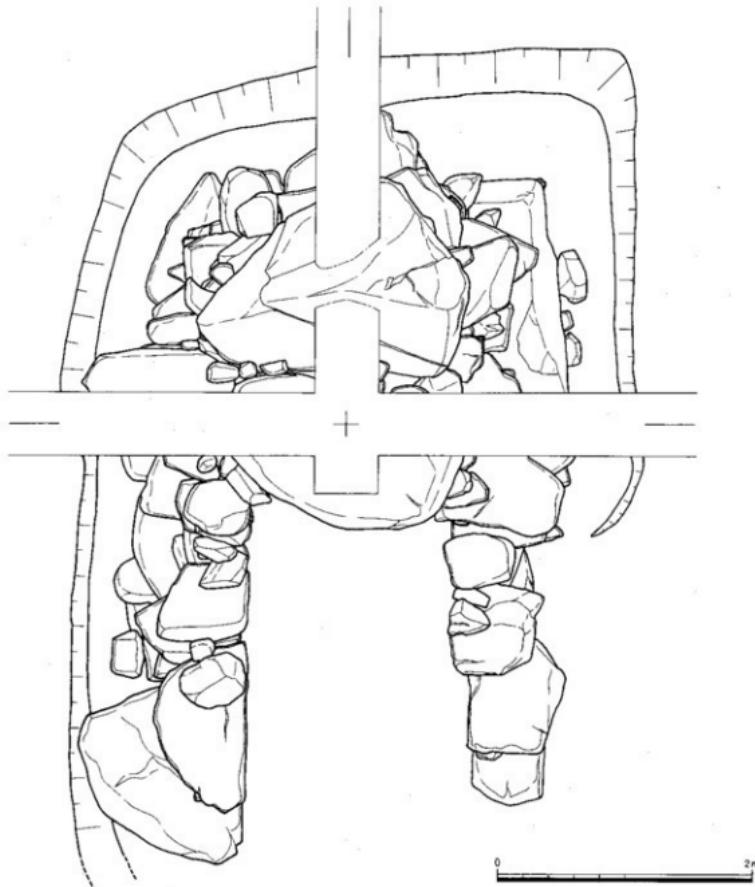
石室の長さは残存する部分、東側壁で4.7m、西側壁で4.2mと計測される。周溝および墳丘の大きさからあえて築造当時の石室全長を復元すれば、8.1m程度に推測される。石室の幅は奥壁付近で約1.9m、入口付近で約2.0mを測り、東西壁はほぼ平行に構築されている。石室入口部分を大きく失っているものの、現存の状況を勘案して無袖の横穴式石室と考えてよかろう。また、残存する2枚の天井石はほぼ水平に保たれており、床面からの石室天井の高さは、奥壁部分で約2.0mである。奥壁は、根石に高さ1.1m・幅1.7m・厚さ0.7mの大型の自然石を用いており、この上に高さ0.7m・幅1.0m・厚さ0.9mの石を乗せた2段で構築されている。この2段目の石は根石に比べ小型であるた



第5図 横穴式石室実測図 ($S=1/50$)

め、両側壁との間に隙間を生じており、そこに0.5m前後の中型の石材を多数充填している。また、天井部と両側壁の間に生じた隙間にも同程度の石材を充填している。

両側壁は、奥壁に接する部分のみ幅1.3~1.5mの大型の根石を用いている。この部分に特に大型の石材を用いているのは、側壁根石部の切り合いの状況から勘案して、最初に奥壁の根石を設置し、それを側壁の根石で安定させるためであろう。側壁の根石となっている他の石材は、幅1m弱の大型の石材を使用している。石材の積み方については、奥壁に接する部分で3段積みとしているのに對し、中心部分に行くに従い大小の石材を用いて、5段以上に積み上げている箇所も見受けられる。また、石室開口部付近では、両側壁共根石とほぼ同じ大きさ、もしくは根石以上の大きさの石材が



第6図 石室平面図 (S=1/40)

2段目に積み上げられている。両側壁共に石材を積み上げていく段階で、段や列を意識した構築方法は採られていない。むしろ、不定型な自然石をいかに安定させて石室を構築していくかに主眼がおかれていたようである。したがって、見た目には両側壁共に石材の隙間が多く認められ、粗雑な造りとなっている。なお、東側壁のみ石室中心部付近で2段目以降の石材がややもち送り気味に構築されている。

石室の構築方法は、石室中央部から奥壁部分にかけては、幅約45cm・長さ約3m程度の隅丸方形の掘り方を掘削し根石を据えつけている。石室西側の掘り方は、石室開口部に至るまで石室とほぼ平行に掘削されている状況が検出された。しかし、石室東側の掘り方は、中央部から1.4mの所までしか検出されず、その先から開口部までは掘り方を掘削せず、旧地表面に直に側壁の根石を据えている。

石室床面は、石室の掘り方底面を床面とし、整地上は特に置かれていません。開口部と奥壁部分の比高差は、約15cmで入口に向かい緩やかに傾斜している。床面には、排水溝等の施設は認められなかった。



第7図 遺物出土状況

第3節 遺物の出土状況

古墳から出土した遺物としては土師器、須恵器、鉄刀・鉄鎌等の鉄器、ガラス玉、耳環等がある。また、直接古墳に伴わない遺物としては、石鎌、古代の須恵器、中世土器等が石室内堆積土から出土している。石室の前端部は烟の造成時に伴い破壊され、石室内部も後世の攪乱を大きく受けているため、検出された遺物の大半は、奥壁や側壁により片寄った状況であった。

石室床面に伴うと考えられる遺物としては、土師器の高坏、耳環、ガラス玉、鉄刀等の鉄器が検出されている。

出土遺物は幾つかのまとまりで検出されており、そのうち石室北東隅の部分から奥壁中央部にかけては、鉄刀、鉄鎌、水晶製の切子玉、ガラス玉等が検出された。ここでは、鉄刀が側壁と平行に置かれており、この付近の遺物は、ほぼ元位置を保っているものと考えられる。また、この部分の堆積土をふるいにかけて、ガラス玉が多数出土している。

奥壁中央部からは、鉄鎌と共に鎌や鑿等の農工具が検出されている。須恵器の破片も1点検出されており、検出状況からこの範囲の遺物も、ほぼ元位置を保っていると考えられる。

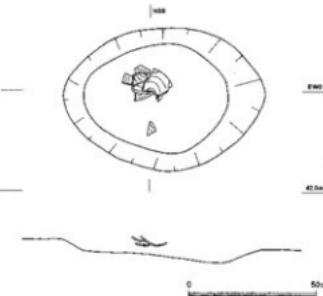
石室西側の側壁の中央部付近では、側壁に沿った状態で約1mの範囲内から鉄鎌が8本検出されている。鉄鎌は、形態が似通ったものであり、検出状況からみても元位置を保っていると思われる。西側側壁の石室開口部付近からは、土師器の高坏が検出された。高坏は坏部のみで細片に破損した状況であった。

石室東側の側壁中央部から約1~2mの地点では鉄刀や鉄鎌等の鉄器が20点以上まとめて出土している。これらの鉄器は、向きが不揃いで、上下の層状に堆積した状況で検出された。この鉄器群は、1箇所に寄せ集められた状況を呈しており、石室の追葬や、古代の石室の再利用時に2次的に移動させられたものと考えられる。

石室中央部からは、耳環や鉄鎌が出土しているが、これらは疎らに点在しており、検出された個体数も概して少ない。この周辺の遺物も、2次的に移動した可能性が高い。

第4節 古墳の再利用

石室の中央部に土壙が検出されている。土壙は橢円形を呈しており、検出面での計測値は長径80cm・短径57cm・深さ5cmを測る。土壙の中心部には、須恵器の椀が破損した状況で検出された。なお、須恵器は床面から3cm程度上部での検出となっている。土壙の上部からは、古墳時代の須恵器の坏身2点と土師器の椀1点、古代の須恵器の椀1点、黒色土器の椀1点が重なった状況で検出された。検出された古墳時代の土器類は、古代の土器類と共に土壙に伴い再利用されたものと考えられる。



第8図 古代の土壙(S=1/20)

第5節 出土遺物

1.須恵器

図化できたものは、ほぼ完形に復元できた壺蓋1と完形に復元された壺身2・3の計3点である。他には平瓶・甕の破片が石室内堆積土から、高壺の脚部の細片が石室床面から検出されている。

壺蓋(1)

口径11.9cm、器高4.4cmを測る。調整は上部をヘラ起こしを行い、内外面共に回転ナデによる仕上げを行っている。口縁端部は丸く取められている。胎土には0.3mm前後の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面灰色、内面灰白色を呈している。

壺身(2・3)

2は口径11.3cm、器高4.2cmを測る。底部は、ヘラ起こしを行っただけの未調整であり、その他の内外面はロクロによる回転ナデを行っている。精良な粘土を使用しており、焼成は良好である。色調は外面灰色、内面灰白色を呈している。立ち上がりは、0.5cmと低い。3は口径10.4cm、器高3.4cmを測る。底部は2と同様にヘラ起こしを行っただけの未調整であり、その他の内外面はロクロによる回転ナデを行っている。胎土は0.5mm大の砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、内外面共に灰色を呈している。立ち上がりは、2と同様に0.5cmと低い。

2.土師器

椀(4)

口径11.7cm、器高3.9cmを測る。調整は、内外面共に丁寧なヨコナデが施されている。口縁端部は、僅かに内側にふくらみ、上部にかるくつまみあげられている。胎土には0.5mm大の長石を多く含み、焼成は良好である。色調は、外面橙色で底部には黒斑が認められる。内面はにぶい橙色を呈する。

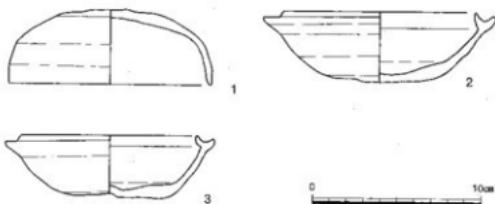
高壺(5)

石室床面から壺部のみ検出され、復元されたものである。口径16.7cm、器高4.3cmを測る。調整は、内外面共に磨滅により不明である。口縁端部は丸く取められている。壺部は、脚部との接合面で剥離している。胎土は精良な粘土を用いており、焼成はややあまい。色調は、外面明褐色、内面黄褐色を呈している。

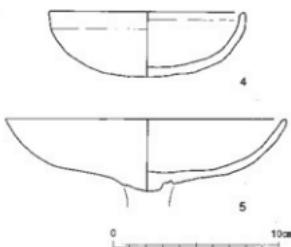
3.鉄器

鉄刀

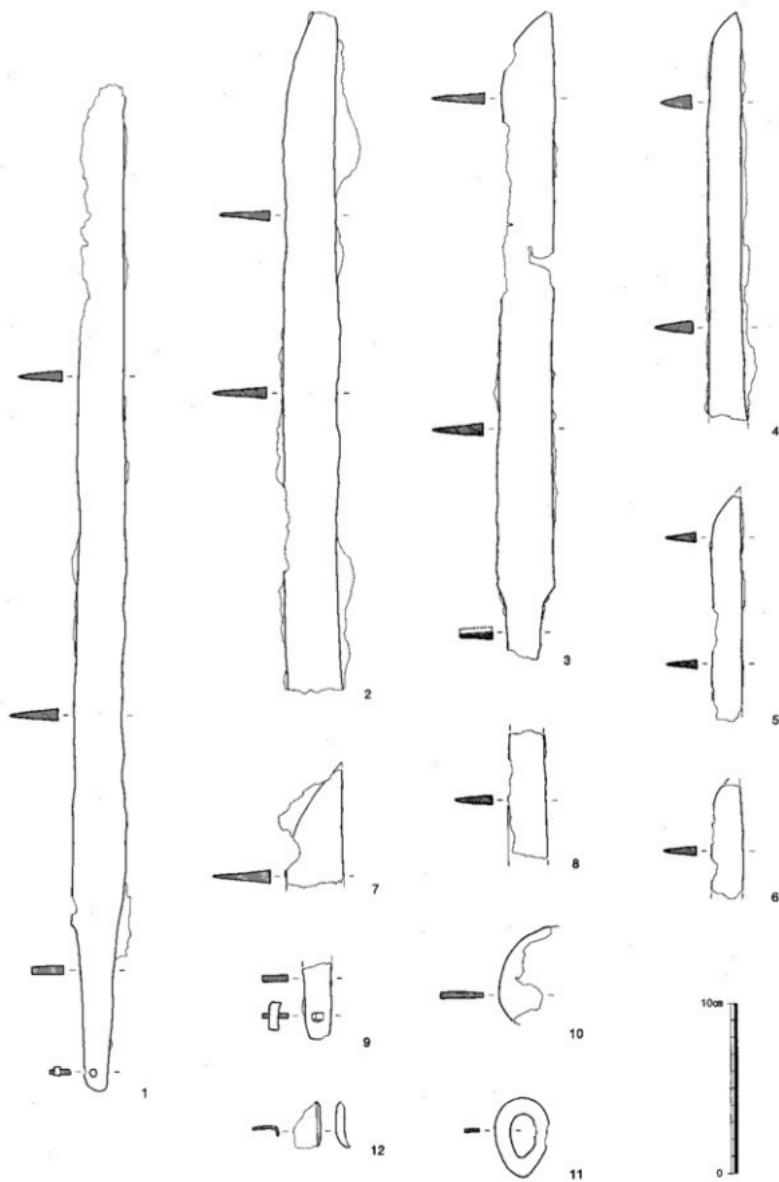
1は大刀で切先部分が欠損しており、全長は不明である。石室北東隅の床面から側壁に平行に置



第9図 須恵器実測図 (S=1/3)



第10図 土師器実測図 (S=1/3)



第11図 鉄刀・刀装具実測図 (S=1/3)

かれていた。銹化が著しく数片に分断され、破片も周囲に散在していた。復元により、残存長59.3cm・刀身長47.0cm・茎長12.3cmを測る。関部分は刃部側に段を有する。刀身最大幅2.8cm・棟幅7mmで、茎中央部分で幅2.0cmである。茎部は棟側から斜めに切り落とされた形態となっている。茎には1箇所の目釘穴が認められ、直径4mmの目釘が一部残存している。2の大刀は、刀身部分である。残存刀身長40.0cm・刀身最大幅3.0cm・棟幅7mmを測る。3の大刀は切先を僅かに欠損するものの、推定刀身長34.0cm・刀身最大幅3.0cm・棟幅7mmを測る。関部は、棟部及び刃部の両側に段を有している。茎部は、途中で折損しており茎長は不明である。茎幅は2.0cmである。

4~7は刀身の切先部分であり、4~6の刀身幅は1~3の大刀に比べ細身である。4の刀は、刀身幅2.0cm・棟幅7mmを測る。5の刀は、刀身幅1.8cm・棟幅5mmを測る。6の刀は刀身幅1.9cm・棟幅5mmを測る。いずれも銹化が進行しており、鍛造面での剥離が著しい。7は銹による変形が著しいが、棟幅が先端に行くほど細くなっているため、切先部分と判断された。刀身幅3.4cm・棟幅8mmを測る。8は刀身幅2.2cm・棟幅6mmを測り刀身の一部であるが、銹化が著しい。9は茎部の端部にあたり、茎幅は1.5cmを測る。5mm角の方形の目釘穴が穿たれており、長さ1.7cmの方形の目釘が貫通している。

鐔

10は銹化により大半が欠損しているもので、推定直径7cmの円形の鐔と考えられる。この鐔はどの大刀に伴うものか不明である。11は1の大刀の関部付近から共に検出されたもので、この大刀に装着されていたものである。平面形は卵形を呈し、長径4.7cm・短径3.1cmを測る。10・11共に透かし、象眼等は認められない。

鞘金具

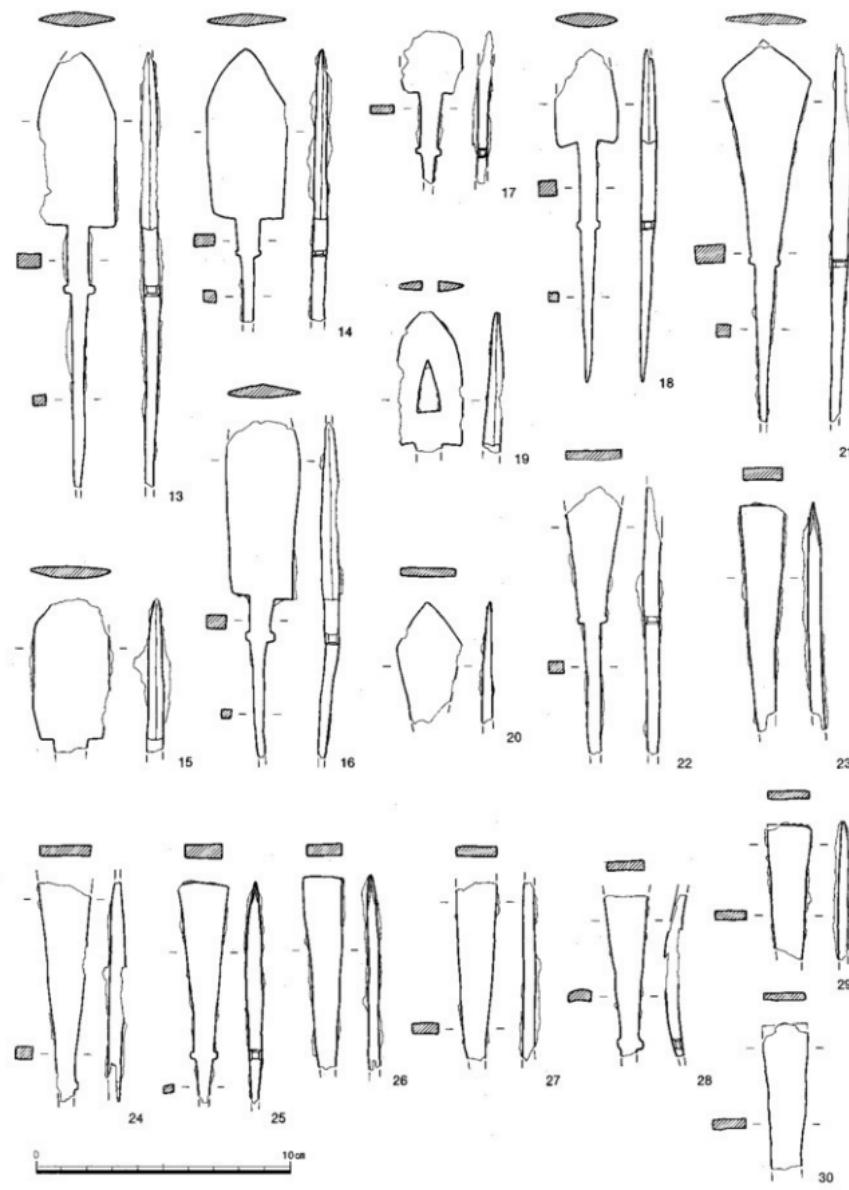
12は1の大刀と共に検出されたもので、大刀の鞘口あるいは鞘尻の鞘金具と思われる。厚さ1.5mmの帯状の鉄板を曲げて成形しているものである。

鉄鎌

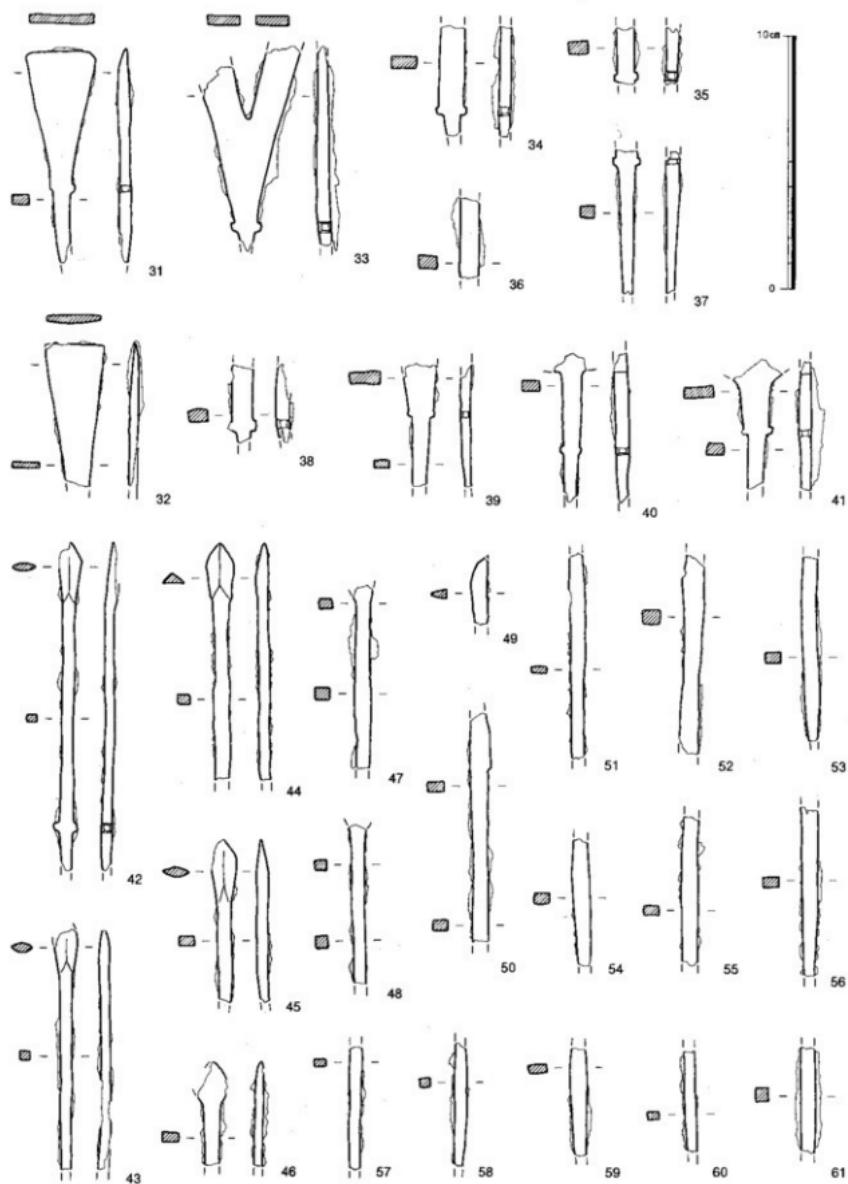
検出された鉄鎌は、破片となっていたものが多く正確な数量を確認することは困難である。鎌身部のみの出土点数を数えると、有茎平根式の鎌が21点、長茎式の鎌が9点確認できた。

13~19は平根の長三角形式鉄鎌である。13は鎌身がやや長い三角形のもので、頭部は完存し長さ2.4cmを測る。頭部の関部に棘状突起を有している。14は鎌身部が完形で鎌身の長さ6.7cm・幅3.2cmを測る。頭部の長さは1.5cmを測り、頭部の関部には棘状突起を有している。15は鎌身部で先端部の欠損により長さは不明である。16は鎌身の先端部を欠損しているが、同形態のものと考えられる。頭部の長さ1.4cmを測り、頭部の関部には棘状突起を有している。17も鎌身部の一部が残っており、鎌身関部の形態から三角形鎌と推測される。頭部の長さ2.1cmを測り、頭部の関部には棘状突起を有している。18は頭部及び茎部が完形の鎌である。頭部の長さ3.2cm・茎部の長さ6.0cmを測る。頭部の関部には棘状突起を有している。19は鎌身中央部に三角形の透かし穴を有する形態のものである。

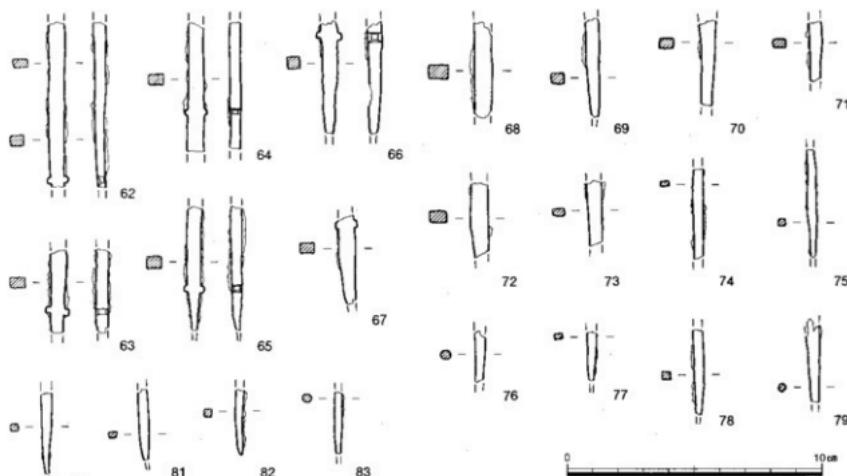
20~21は平根の圭頭式鉄鎌である。20は先端部のみで、鎌身関部を欠損している。21は鎌身の先端をわずかに欠いている。鎌身部の最大幅は3.5cm、鎌身関部は棘状突起を有している。22は鎌身の先



第12図 鉄鎌実測図 1 (S=1/2)



第13図 鉄鎌実測図 2 (S=1/2)



第14図 鉄鎌実測図 3 (S=1/2)

端部を欠損しているが、21と同じ形態と考えられる。鎌身関部には棘状突起を有している。

23~33は平根の方頭式鉄鎌である。23は鎌身の長い形態である。24は先端部を欠損しているが、23同様に鎌身の長い形態である。鎌身関部には、僅かではあるが棘状突起が認められる。25は鎌身の長さ6.7cmを測り、鎌身関部には棘状突起を有している。26~30は鎌身部の破片である。28は鎌身関部に棘状突起を有している。31は先端部の幅が広い形態のものである。鎌身部の長さ5.4cmを測り、鎌身関部には棘状突起を有している。32も31同様に先端部の幅が広い形態である。33は他の方頭式の鉄鎌に比べ大型のものであり、先端部を欠損しているが鎌身の中央部に逆三角形の透かし穴を有している。鎌身関部には棘状突起を有している。

34~36は長三角形式鉄鎌の頭部と考えられる。34・35は頭部関部であり、棘状突起を有している。37は茎部の破片である。関部の残存から棘状突起が確認された。38・39は頭部の広がりから方頭式鉄鎌と考えられる。共に頭部の関部には棘状突起を有する。40は頭部関部の広がりから18と同形態と考えられる。頭部の長さ3.0cmを測り、頭部の関部には棘状突起を有する。39は有茎平根鉄鎌の破片であるが、形式は不明である。頭部の長さ1.8cmを測り、頭部の関部には棘状突起を有している。

42~46は柳葉式長頭鎌である。42は鎌身の長さ2.5cm・幅0.9cm・頭部の長さ8.7cmを測る。頭部の関部には棘状突起を有する。43は先端部を欠損した鎌身部である。鎌身部の幅0.8cmを測るが長さは不明である。44は鎌身部の長さ2.3cm・幅1.1cmを測る。45は鎌身部の長さ2.5cm・幅1.0cmを測る。46は欠損した鎌身部である。47・48は鎌身部に近い頭部の破片である。

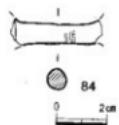
49・50は片刃式の長頭鎌である。46は鎌身部の幅0.8cmを測るが、長さは破損により不明である。47は鎌身部の幅0.7cmを測るが、長さは欠損により不明である。

51~67は長頭鎌の頭部と考えられる。このうち62~67は頭部の関部で棘状突起を有する。

68~83は頭部ないしは茎部の破片であるが、破片のため鉄鎌の形式は確認できなかった。

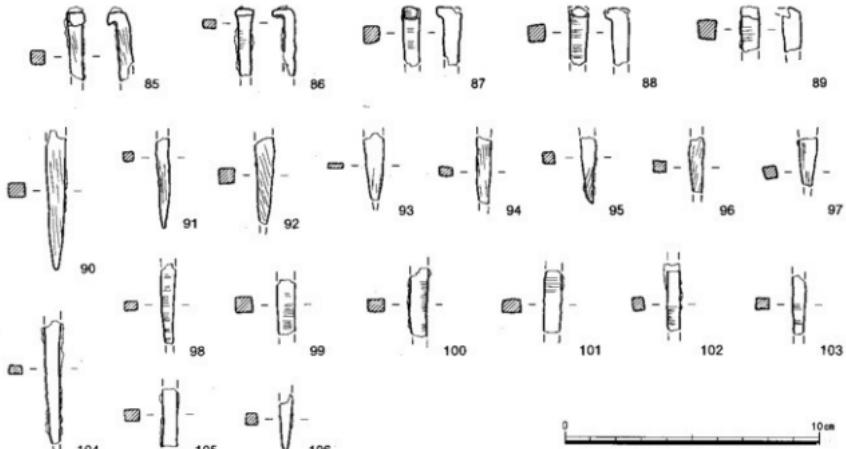
両頭金具

84は弓の飾金具、いわゆる両頭金具といわれているものである。本来両端には球状の頭部を持つものであるが、欠損により棒状の胴部のみが確認されている。胴部の両端がわずかに開きぎみとなっており、花弁状の突起を有していたと考えられる。棒状の胴部は、現存で長さ3.6cm・直径0.8cmを測り、僅かではあるが一部に垂直方向の木目痕が確認されている。なお、検出されたのは石室内の堆積土中のため、元位置は不明である。



第15図 両頭金具

鉄釘

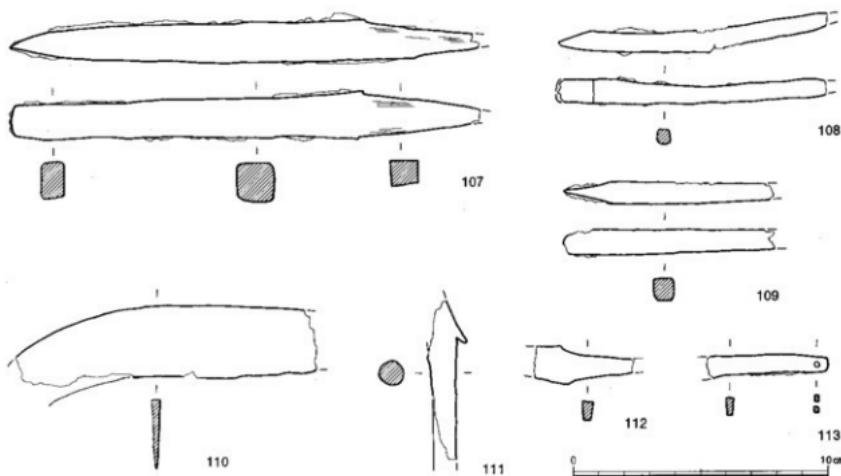


第16図 鉄釘実測図 (S=1/2)

85~106はすべて石室堆積土から出土した鉄釘である。85~89は釘の頭部で、釘の先端部を鉄板状に延ばし、L字形に折り曲げて形成されている。85は頂部6×7mmの平坦面を持つ。断面は6mm角の方形で、垂直方向の木目痕が認められる。86のみ断面が5×3mmの長方形を呈する。この先端部はさらに平らに延ばされて形成されている。86は断面は6mm角であるが、折り曲げられた先端部が5mm角に加工されている。また、先端部には木目の痕跡が残存している。88~95は断面6mm角の方形である。いずれも先端部を一部欠損しているが、形態としては前述の3点と同様の先端部を呈する形式の釘と考えられる。86~89は水平方向に木目の痕跡が残っている。90~97は垂直方向に木目痕を残している破片である。98~103は水平方向に木目痕を残している破片である。104~106の破片には木目の痕跡は確認されなかった。

その他の鉄器

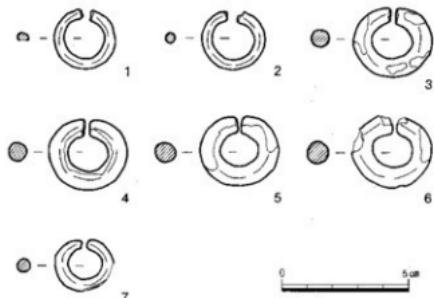
107~109は鑿である。107は他の2点に比べ大型の鑿である。刃部は両刃で、幅1.5cmを測る。身部の長さは14.0cm・断面1.5cm角を測り、茎部との境には両側に段を有している。114は小型の鑿で、



第17図 その他の鉄器 (S=1/2)

刃部は片刃に作られている。刃部の長さ1.4cm・幅0.9cmを測り、身部は6mm角の隅丸方形である。109は小型の鑿で刃部は両刃に作られている。刃部の長さ2.0cm・幅1.0cmを測り、身部は9mm角である。110は石室奥壁寄りの中央部から検出された鎌である。両端部を欠損しているため、全長は不明である。刃部の幅は3.8cmを測る。111はヤスで先端を欠いてはいるものの途中に5mm程度の棘状のかえりが認められる。身部の断面は円形で直径1.0cmを測る。112・113は共に刀子の茎部である。112は闊の部分の両側に段を有するものである。113は茎部の端部である。茎部の幅は8mmを測り、端部付近には直径2mmの目釘穴が認められる。

4. 耳環



第18図 耳環実測図 (S=1/2)

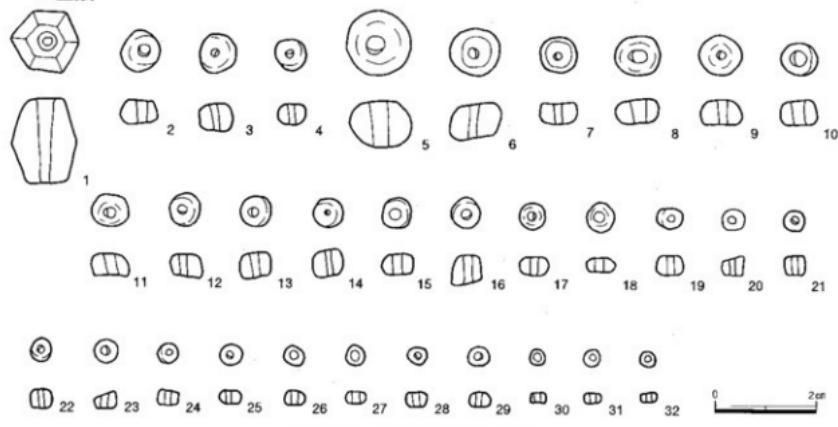
番号	外径(cm)		断面径(cm)		重量 (g)	備考
	(上下)	(左右)	(上下)	(左右)		
1	2.34	2.43	0.41	0.42	4.54	銅芯金貼り
2	2.26	2.46	0.04	0.39	5.47	タ
3	2.77	3.10	0.76	0.75	16.20	銅芯銀貼り
4	2.74	3.08	0.73	0.75	16.88	タ
5	2.81	3.22	0.84	0.85	24.15	タ
6	2.88	3.14	0.83	0.84	20.00	タ
7	2.01	2.28	0.54	0.50	5.28	タ

表1 耳環計測表

1~3は石室床面から検出され、4~7は石室の堆積土中から出土している。1は石室東壁の南側の鉄器群から50cmばかり離れて検出された。直径2.4cm程度・断面径0.4cm程度のやや細い作りの耳環で

ある。耳環は、銅芯金箔貼りで形成され、金箔の残存状況は非常に良い。2は、1から30cmばかり離れて検出された。直径2.5cm程度・断面径0.4cm程度で1同様のやや細い作りの耳環である。銅芯金箔貼りで、金箔の残存状況は非常に良い。この2点の耳環は、検出された位置が近くそれぞれの大きさも揃っており、対になるものと考えられる。3は石室中央部から40cmばかり離れて検出された。1・2に比べ太く、重量も約3倍に近い耳環である。銅芯銀箔貼りで製作されているが、表面の錆化が進行しており、一部に銀が確認される程度である。4~6も同様に銅芯銀箔貼りで形成された太めの耳環である。前述の4点の銀環は、外径・断面径・重量の計測から勘案して、強いて言えば3と4が対、5と6が対と思われる。7は銅芯銀箔貼りで製作された耳環であるが、1・2同様に細い作りである。

5. 玉類



第19図 玉類実測図(S=1/1)

水晶製切子玉1点、土製練玉3点、ガラス玉28点が出土している。

水晶製切子玉

石室奥北東隅の大刀付近から検出された。直径12.48mm・孔径3.83mm・長さ16.70mm・重量3.02gを測る。加工は6面に施されており、中央部の孔は片側から穿たれ、わずかに迎え打ちを行っている。

土製練玉

石室内の堆積土中から検出されている。2は、直径7.66mm・孔径2.33mm・厚さ4.62mm・重量0.28gを測る。3は、直径7.00mm・孔径1.48mm・厚さ4.89mm・重量0.30gを測る。4は、直径6.28mm・孔径1.41mm・厚さ4.23mm・重量0.16gを測る。色調はいずれも灰黄褐色から黒褐色を呈している。

ガラス玉

5~9が1cm前後の大きな玉で、10~32は小玉である。色はほとんどのものが青色を呈しているが、濃い色のものと淡い色のものが混在している。製作技法から見ると、玉の縁が鋭角のものは管状のガラス棒を切断して個々に製作されたものであり、玉の縁が丸みを帯びているものは個々にガラス

番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	色	番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	色
1	12.91	4.07	8.60	1.82	深緑	15	5.03	1.25	4.43	0.13	青色
2	9.88	2.10	6.75	0.94	青色	16	4.43	1.66	3.83	0.10	水色
3	7.41	1.58	4.40	0.37	青色	17	4.09	1.04	3.99	0.10	青色
4	8.83	3.29	4.47	0.40	タ	18	4.15	1.21	3.99	0.10	水色
5	8.33	1.50	4.69	0.44	タ	19	4.54	1.46	3.51	0.09	青色
6	6.76	2.72	5.44	0.30	タ	20	3.92	1.16	3.45	0.09	タ
7	6.86	2.16	4.29	0.29	タ	21	4.50	1.33	2.78	0.07	タ
8	6.35	1.44	4.85	0.30	タ	22	4.40	1.47	2.60	0.06	黄緑
9	5.86	1.71	4.74	0.23	タ	23	4.29	1.66	2.17	0.06	タ
10	5.77	1.05	5.29	0.24	タ	24	4.10	1.34	2.63	0.05	水色
11	6.11	2.12	4.12	0.21	タ	25	4.00	1.39	2.48	0.07	タ
12	5.50	2.20	5.53	0.23	水色	26	3.41	1.17	2.14	0.03	青色
13	5.38	1.49	3.84	0.16	青色	27	3.42	1.15	1.83	0.03	水色
14	5.53	1.92	2.98	0.12	タ	28	3.10	1.11	1.79	0.02	黄緑

表2 ガラス玉計測表

を心棒に巻き付けて形成されたものと考えられる。特に大きめの玉は巻き付けで作られた製品が多いようである。

6. 古墳に伴わない遺物

石鎌

石室内の堆積土から弥生時代のものと考えられる石鎌が1点検出されている。

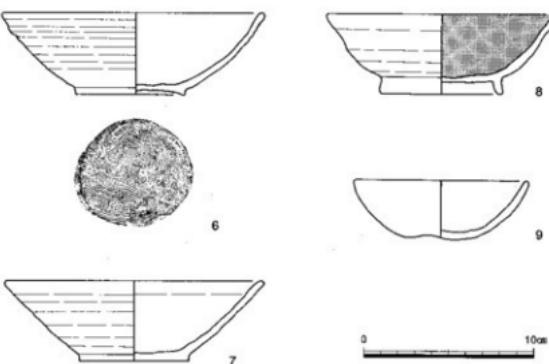
石鎌は、サヌカイト製で平基式のものである。長さが1.87cm・幅1.39cm・厚さ0.41cmを測り、重量は0.8gを量る。



第20図 石鎌

土器

6～8の土器は、石室内の古代の土壤内およびその上部からまとめて検出された。6は土壤の内部、底面から3cm程度上部で検出され、口径15.3cm・器高4.8cmを測る。底部は糸切りを行い、その他の内外面はロクロによる回転ナデを行っている。胎土には0.5mm大の長石を少量含み、焼成は良好である。色調は内外面共に灰白色を呈している。7は、土壤の上面から古墳時代の須恵器と共に検出され、口径15.1cm・器高4.7cmを測る。底部は7同様に糸切りを行い、その他の内外面はロクロによる回転ナデを行っている。胎土には0.5mm大の長石を含み、焼成は良好である。色調は、内外面共に灰白色を呈している。8は7と共に検出された高台の付いた黒色土器



第21図 土器実測図 (S=1/3)

で、口径13.3cm・器高4.7cmを測る。内外面ともにヨコナデによる調整を行っている。胎土には精良な粘土を用いており、焼成は良好である。色調は、外面はにぶい黄橙色、内面は黒色を呈している。9は周溝内の堆積土中から検出された中世の土器で、口径10.1cm・器高3.4cmを測る。調整は磨滅により不明である。胎土には精良な粘土を用いているが、焼成はややあまい。色調は、外面はにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色を呈している。この他、古墳の北側の堆積土から弥生土器片、石室内部の堆積土からは中世の土鍋の破片等が検出されている。

第4章 まとめと考察

発掘調査を行った清戸7号墳は、段々畠の造成によって墳丘の大半が削られており、石室前端部も大きく破壊を受け、残存状況は良くなかった。石室内部は、古墳の再利用が行われたこともあり、遺物の2次的な移動も著しく、内部の状況の復元は困難であるが、発掘調査により理解できた点を以下整理してみたい。

古墳の年代

この古墳の年代を考える根拠として、検出された土器類があげられるが、土器類は古墳の再利用時にもちだされたためか、出土個数は少なかった。しかも、残された僅かの須恵器も古墳の再利用時に同様に再利用されており、石室床面から検出されたものではない。こうした状況ではあるが残された僅かな手掛かりとして須恵器を観察した。須恵器は蓋坏1点と坏身2点が検出されている。坏身については、口径10~11cm前後・器高3.5cm前後で2点とも底部はハラ起し未調整となっている。立ち上がりは0.5cmと低く、口縁端部が受部より僅かに上に出ている状況である。この形態を陶邑の編年⁽¹⁾で当てはめてみれば、TK-209の時期に併行するものである。実年代としては、7世紀初頭が当てられよう。蓋坏も口径・器高・製作技法等を合わせ見て、同時期のものである。しかし、耳環の出土点数から当古墳は単一葬ではなく、数次にわたり追葬が行われたことが思慮される。したがって、須恵器の示す年代が直ちに古墳の築造年代を反映しているとは言いかたい。また、石室の規模及び構造を周辺の後期古墳と比べてみると、6世紀後半の時期のタイプのものに類似している。限られた資料から時期を述べることは推測の域ではあるが、古墳は6世紀後半から末ごろにかけて築造され、その後7世紀にかけて数次にわたる追葬が行われたと思われる。

古墳の規模

当古墳は先述のように後世の破壊が著しく、正確な数値で規模を表現することが困難である。そのため周溝の残存状況からあくまでも推定復元値で古墳の規模を概観してみる。古墳は周溝の外周部分の計測で直径約13mと推定され、構築された墳丘の形態はほぼ円形を呈していたものと考えられる。内部主体である横穴式石室は、石室開口部の大きな破壊により、石室全長の5分の2以上が失われていた状況であった。古墳の直径から築造当初の石室全長を復元してみると8m以上の長さをもつ石室と考え得る。石室幅は2mを測り、石室床面からの天井高は2mを測る大型の横穴式石室となっている。大きな規模の石室ではあるが、両側壁共に袖は有していないと思われる。

ここで市内に存在する無袖の大型石室を有する古墳を概観してみる。発掘調査が行われ、規模が確認された古墳は、現在までに3基存在している。倉敷市児島阿津2丁目に存在する琴海1号墳⁽²⁾は、古墳の直径12mを測る。石室の規模は、全長7.4m・幅2.1m・高さ1.9mを測る。倉敷市速島町に存在する茂浦2号墳⁽³⁾は、古墳の直径15mを測る。石室の規模は全長9.3m・幅2.2m・高さ2.0mを測る。この古墳に近接した茂浦3号墳⁽⁴⁾は、古墳の直径16.0mを測る。石室の規模は、全長9.1m・幅

2.0m・高さ2.1mを測る。

さらに、石室の規模および平面プランを比較してみると、湾戸7号墳と琴海1号墳・茂浦2号墳は極めて似通った造りとなっている。いずれの古墳も6世紀後半から末ごろの築造時期が推定されている。このことから、当地方における当該時期の大型古墳石室構築には、一定の企画が推測される。したがって、葬送儀礼は共通認識の基に執り行われたと考えられる。

古墳の被葬者

江戸時代の干拓により、現在は陸地となっている福田町は、古墳時代には瀬戸内海に直接面した海岸部であった。眼下に海岸線が広がる丘陵に築かれた湾戸7号墳の被葬者は、いかなる人物であろうか。まず、当古墳の存在する丘陵の下部には、古墳時代の砂州が南北に長く延びており、砂州上には製塩遺跡である湾戸遺跡が存在し、現在でも製塩土器片を確認することができる。したがって、当該地域の生活基盤は、海浜生活を中心とするものと位置づけられる。この集団の首長が当古墳に葬られたことが第一に推測されるところである。被葬者が海浜生活と関係することは、当古墳の副葬品からも裏付けられる。そのことは、石室内から検出されたヤスが物語っている。しかし、出土品の中には鉄製の鎌も検出されており、海岸部から背後に広がる丘陵部の限られた土地を利用し、農業も営んでいた生活の一部も垣間見ることもできる。

また、同様に海浜生活を基盤とする首長層の古墳として当古墳の周辺にもいくつかのグループが確認されている。倉敷市広江1丁目に存在する広江・浜遺跡は、多量の製塩土器が確認された製塩遺跡であり⁽⁵⁾、この遺跡の背後には広江南地古墳群等が確認されている。この遺跡の南に延びる児島半島では、倉敷市児島塩生の金浜遺跡と金浜古墳⁽⁶⁾が存在し、同様の関係が認められる。また、児島半島の南には阿津走出遺跡と琴海1号墳が存在し、ここでも古墳と被葬者の生活基盤をうかがうことができる。

先述のとおり、倉敷市南部の瀬戸内海に面した地域では、海岸部の砂州ごとに幾つかの海浜生活を営んでいたグループが形成され、その遺跡の立地した場所の背後の丘陵部に古墳が築かれる状況が多く確認されている。

古墳の再利用

湾戸7号墳の横穴式石室の中央部から古墳の再利用と考えられる土壙が検出され、これに伴い古代の土器類も検出されている。土壙は床面の計測値で、長径57cm・短径44cmの梢円形を呈している。この土壙の床面から古代の須恵器の椀が1点検出され、土壙の上部から古墳時代の須恵器の壺身2点、土師器の椀1点、古代の須恵器の椀1点、黒色土器の椀1点が重なった状況で検出されている。

検出された土器類から土壙の年代を見てみることとする。床面および上面から検出された須恵器の椀は、いずれも口径15cm程度・器高5cm弱を測り底部を糸切りで成形されている。これらの実年代は、おおむね11世紀前後が比定される。土壙の上面から検出された黒色土器の椀は、口径13.3cm・器高4.7cmを測り、やや腰が張り、内面のみ黒色の土器である。土器は、黒色土器A類の10世紀中頃のもの⁽⁷⁾と比定される。これらの土器から土壙の年代を推定してみると、11世紀の初め頃に土壙が掘削されたと考えられる。

また、市内で現在までに確認されている古墳の再利用は次のとおりである。倉敷市西尾の大池上2号墳の石室羨道部近くから土師器の椀と皿が検出されている⁽⁸⁾。検出された遺物の年代は、10世紀中頃と考えられている。倉敷市山地の奥の池2号墳の石室羨道部堆積土中から須恵器の壺が検出されている⁽⁹⁾。検出された遺物の年代は、10世紀中頃と考えられている。倉敷市西坂の西坂古墳の石室南半から玄門にかけての堆積土中から土師器の椀・皿・鍋が検出されている⁽¹⁰⁾。これらの遺物の年代は、10世紀後半から11世紀前半と考えられている。以上のように数少ない事例であるが、当市域における古墳の石室再利用は10世紀中頃から11世紀前半にかけて行われていたようである。

ただし、上記の古墳すべてを墓所ないしは信仰の場として再利用されたと考えるには、積極的な根拠に乏しい。しかし、清戸7号墳の例を見てみると、前述の古墳と異なり石室内に墓壙と考えられる土壙を造っている。ここでは古墳時代の須恵器が供獻土器として再利用されている。したがって、当古墳においては、古墳を墓所として石室を再利用したこと示していると言えよう。

- 註(1) 田辺昭三「須恵器大成」角川書店1981年
- (2) 山磨康平・福田正継「琴海1号墳」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36」岡山県教育委員会 1980年
- (3) 鍋谷守秀ほか「茂浦古墳群」「倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第5集」倉敷埋蔵文化財センター 1996年
- (4) 註(3)文献
- (5) 間壁忠彦・間壁直子ほか「広江・浜遺跡」「広江・浜遺跡」倉敷市教育委員会 1979年
- (6) 間壁忠彦・間壁直子ほか「金浜古墳」「広江・浜遺跡」倉敷市教育委員会 1979年
- (7) 高柳市教育委員会 橋本久和氏の御教示による。
- (8) 間壁直子ほか「大池上古墳群2号」「王墓山遺跡群」倉敷市教育委員会 1974年
- (9) 福本明「倉敷市奥の池2号墳出土の須恵器瓶」「倉敷考古館研究集報 第16号」1981年
- (10) 中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81」岡山県教育委員会 1993年

図 版

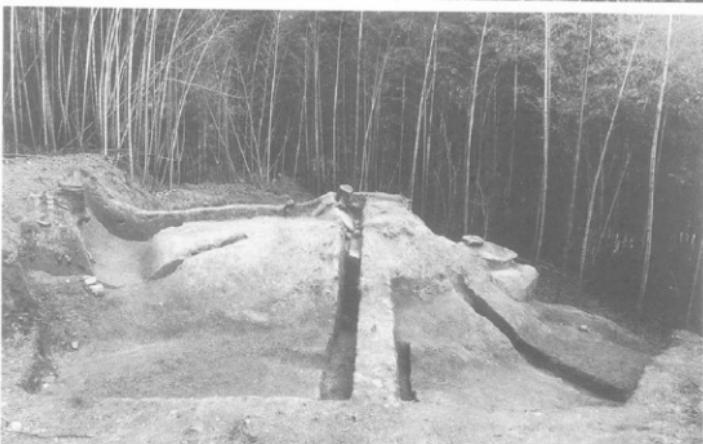
1. 調査前の状況



2. 墳丘検出状況
(南から)



3. 墳丘検出状況
(西から)



図版2



1. 調査終了後
(南から)



2. 調査終了後
(北から)



3. 調査終了後
(西から)

1. 土層断面(北側)



2. 土層断面(西側)



3. 横穴式石室



図版4



1. 遺物出土状況(1)



2. 遺物出土状況(2)



3. 調査風景



1



2



3



4



5



11

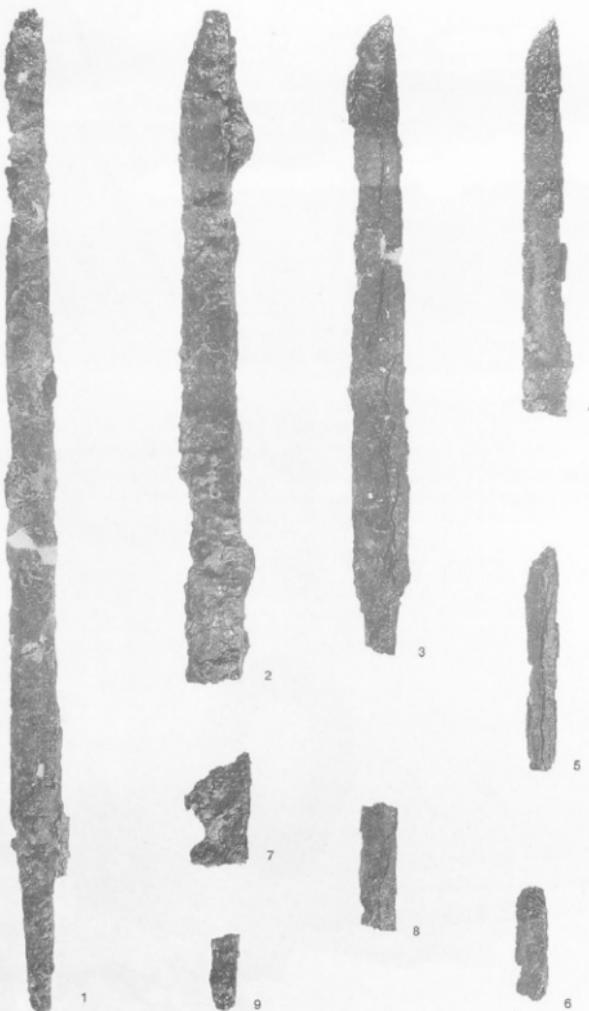


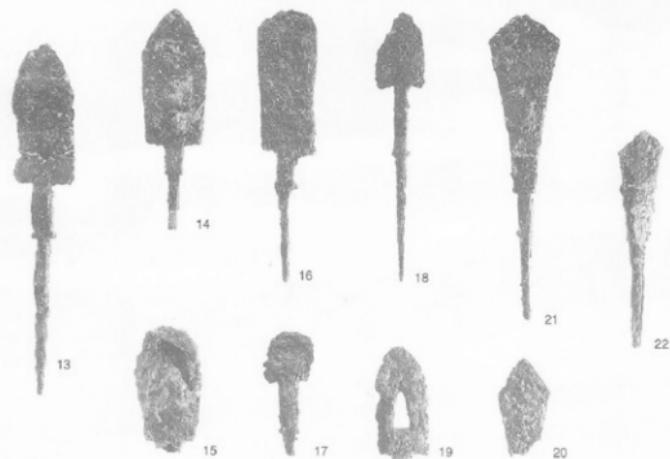
10



12

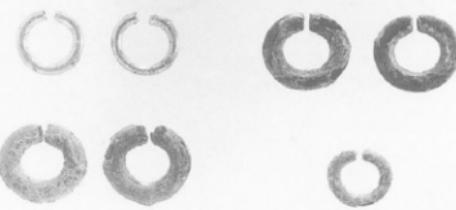
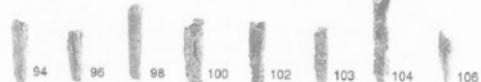
図版6 鉄器(2)



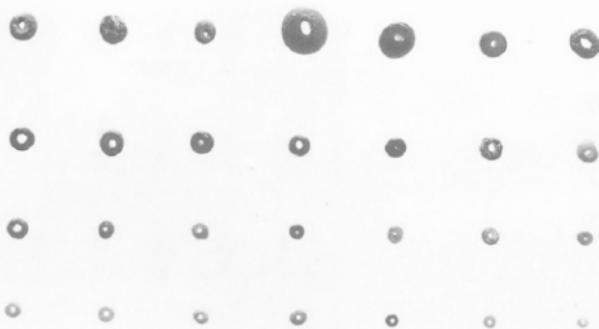


図版8 鉄器(4)





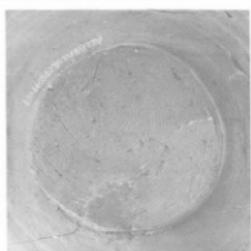
図版10 玉類・その他の遺物



6



7



8



9



報告書妙録

ふりがな	わんどななごうふん							
書名	湾戸7号墳							
副書名								
卷次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	片岡弘至・鍛谷守秀							
福集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 TEL086-454-0600							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積	調査原因	
わんどななごうふん 湾戸7号墳	おがやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 ふくだちょうふくだ 福田町福田	33202 7-43	34° 32° 08°	133° 46° 38°	19970213～ 19970422	300 m ²	特別養護老人 ホーム建設工 事に伴う発掘 調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
湾戸7号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器・土師器・鉄刀・刀 装具・鉄鎌・両頭金具・耳 環・水晶製切子玉・土製練 玉・ガラス小玉			大型石室墳 石室の再利用	

湾戸7号墳

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第7集

平成10年3月31日 印刷発行

編集・発行

倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地

TEL 086-454-0600

印 刷

田中平版印刷株式会社

The Excavation Report
Of
Wando 7 Go Kofun In Mizushima

Volume 7

Kurashiki
Archaeological Center

March 1998